

(一)

大通りを入ると、嘘のように静かな住宅街だった。代々木の駅からの道順を教えられたときには、代々木の街中のどこに人が静かに暮らせるようなところがあるものかと思つたのだが、山手線と中央線の大きなガードをくぐって、一筋入っただけで、そこはちよつとした山の手の住宅街だった。その昔は、大名・旗本の屋敷地だったのだろう。それが切り刻まれて、ブロック塀の住宅が連なつていた。その一画に、店先に茄子や胡瓜のザルを並べた八百屋があつた。巻き上げ式のくたびれた日除けも、キャベツを載せた木箱も年季を感じさせた。いかにも古くからそこで八百屋をやっているという様子の人なつっこそうなオヤジと目があつたので、だいたい見当はついていたが、道を尋ねてみた。

すると、その八百屋は、「ああ、あの首括つた先生の家だね。」

石原寿郎としろうの自死は一九六九年九月。私が石原家を訪ねたのは、二十三回忌を二カ月後に

控えた一九九一年の夏である。東京帝大医学部出の医師にして歯科医専で学びなおして歯科医師となり、クラウンブリッジ学（固定式補綴分野）の第一人者と言われた石原寿郎が、地元では二〇年を経てもなお「首を括った先生」として記憶されているのだ。

この日、私は石原寿郎の未亡人石原和かずを尋ねて、いくつかのことを確かめたかった。もちろん縁もゆかりもない者が尋ねていくわけだから、私の中には、はっきりとした意図がなければならぬ。

復員後、東京帝大医学部整形外科の副手に復職した寿郎が、半年も経たないうちに専門学校に編入し、歯科医師に転じた理由は何だったのか。古い同級生の中には、当時の東京医科歯科大学の学長だった長尾優（一九四四～一九六一年、東京高等歯科学校および歯科専門学校校長、東京医科歯科大学学長）が、知己のあった寿郎の父親に頼んだのだらうと憶測するものもいた。長尾と寿郎は親戚筋にあったとか、寿郎の父親は歯科の歴史上にも知られるような人物で、寿郎が歯科を継ぐのは自然な流れだったと話す者もいたが、まったく根拠はない。父親の痕跡は、わずかに歯科雑誌の主筆であった高津式（一九一九～一九四〇年『中京歯科評論』、『日本口』、『衛生』、一九四五～一九六五年『日本歯科評論』）が「紺飛こんがすり白時代の友人」①と書き残しているのみである。妻の和は、寿郎が歯科に転じた理由のひとつに、

軍医としての従軍体験があったのではなかったかと言う。

昭和十七年に戦時下の繰り上げで東大を卒業し軍医となった石原は、北海道旭川の部隊に入り、旭川陸軍病院勤務となった。内地勤務の軍医のもっとも重要な職務は徴兵検査である。村々から集められた青年たちは、禪を外し、素っ裸になって一枚の診査用紙を手に持って講堂に並ぶ。素っ裸で身体検査を受けるのであるが、その列の行き着く最後に軍医が座っている。青年の差し出す診査用紙を受け取った軍医はチラッと目の前にぶら下がった外陰部に目をやって、素っ裸の青年を見上げると判を捺す。一応、梅毒の有無を診査しているということだろう。

「何が甲種合格で、何が乙かって？ 筋肉がついていれば甲、背が低くて痩せて眼鏡をかけてれば乙、馬鹿みたいなもんだ。そこに医者ハンコがあればいいんだよ。それで甲の判を捺せば、合格即入営だ。入営ということは即シベリア行きだが、乙なら内地というわけだ。ひどいもんだよ。」

格別深い意味もなく和が尋ねたことに、寿郎は腹立たしげに嘆いた。シベリア行きというのは和の記憶違いで、出征先は北はソ連国境から南はニューギニアに及び、敗戦とともに南樺太の兵士がシベリア抑留になったことを嘆いていたのであろう。軍医というもの